

「古墳に埋められた刀から  
古代「日韓」交流を追及する」を聴いて

聴講日：H30.6.2  
むきばんだやよい塾第19期

日本列島に刀が現れたのは紀元前後の頃で、最初の刀は中国から伝わった素環頭大刀と呼ばれるものです。鳥取県東伯郡宮内第1遺跡1号墓からは全長94cmの大刀が出土しており、同時代のものとしては日本最長です。この刀は手で握る部分が短く、これは中国から伝わった素環頭大刀の柄頭を切断したからだと考えられています。

大刀はその多くが古墳からの出土品であるため、木製のものは腐朽して伝わらず、わずかに鹿角製のものがあるほかは、すべて鉄製あるいは金銅製です。刀身が残っているものも少なく、柄とか鞘の拵えなどから装飾付大刀と呼ばれていて、柄頭の形状から、環頭大刀、頭椎大刀、圭頭大刀、円頭大刀、方頭大刀、蕨手刀、に分類されます。

頭椎大刀とは握りの先端にあたる柄頭の部分が拳状にふくらんでいる形式の大刀で、『古事記・日本書紀』に出てくる「頭椎大刀」を対照させたものです。列島内で作られたと考えられていますが、この大刀が実戦用のものでないことは明らかで、儀礼用であったと思われる。

環頭大刀は頭が輪形になっているところからの名称で、元来中国から朝鮮を経て伝えられた形式に属しています。輪っかだけの素環頭大刀の他、輪っか内の紋様により、三葉環頭大刀、三壘環頭大刀、単龍単鳳環頭大刀、双龍環頭大刀などがあります。この文様は大刀が作られた朝鮮半島の各地域の特徴と関係があり、出土地と製作地の関係性を検討するうえで重要な要因となります。また、列島内の出土分布には偏りが見られ、また文様ごとにその偏りが異なるという特徴もあります。

### 山陰に出土している環頭大刀

山陰には、18点という他地域に比べて非常に多い環頭大刀が出土しています。特徴のひとつは単龍単鳳環頭大刀が出土していることで、この環頭大刀は畿内の権力中枢と深い関係が考えられているものなので、この地域と畿内中央との関係性が考慮されます。

御崎山古墳出土の大刀は環頭に正面を向く獅が鑄出され、獅は大きく口を開け、環の下にかみついたように表現されていて、獅嚙環頭大刀と呼ばれるものです。これは朝鮮半島の羅州・伏岩里遺跡から出土したものとよく似ていて、この地域と百済との関係が注目されています。威信材として中央から配布されたものでなく、朝鮮半島から直接伝えられた可能性も考えられます。

伯耆地方には出雲では出土が確認されていない三壘環頭大刀が出土しています。これは、出雲と関係する中央の集団とは別の集団との関係性を示すものかもしれません。

柄頭に2匹の龍が向かい合って玉を喰む造形の双龍環頭大刀が10点も出土しているのも山陰の特徴です。この造形は単龍単鳳環頭大刀よりも時代が新しいタイプの大刀で、蘇我氏との関係が議論されている大刀です。この大刀が出土するところは蘇我氏との結びつきが考えられています。またこのタイプの大刀は分布の偏りが希薄になる傾向があり、このことは、中央の勢力が統一されていく関係と連動していることを示す特徴と思われます。

1925年に考古学愛好家が、かわらけ谷横穴墓から発掘した環頭大刀も、双龍環頭大刀です。まれに見る良好な保存状態を保っていて、大刀外装の金銅板がほぼ完存し、本体の鞘木、柄木の大半が腐らずに原形を留めています。刀身は反りのない直刀で、昭和30年代に研ぎ師により研がれ、古代の輝きを取り戻しています。環頭の双龍は、極度に簡略化されており、双龍環頭大刀の中でも末期の作と考えられ、7世紀初頭に製作されたものとみられます。

## 環頭大刀の製作技法

これまでの製作技術研究の多くは観察・推定法によって行われてきました。しかし、この方法には限界があることを、例に挙げて説明がありました。

その一つは三重県の坂本古墳から出土した頭椎大刀の復元作業に関わられた経験です。この大刀は柄頭の部分が拳状にふくらんだ球状の曲面をしているので、考古学の合理性から推定すると、木材で型を作り、その型に金属の板を叩いて形成する必要があると考えられます。しかし、現代の金工作家によれば、当金とハンマーだけで難なくこの形状は形成できてしまうそうです。考古学者が合理性から推定した技法が、実際の製作技法に必ずしも当てはまらないのです。

もう一つの例は金板圧着技法においてです。宮山古墳から出土した銀錯貼金環頭大刀は、アマルガム法で金メッキできない鉄素材に対して、表面に細かな凹凸を作ったその上にシート状の金板を打ち付ける金板圧着技法が用いられています。韓国の龍院里遺跡から出土した鳳凰文環頭大刀にも、同様の表面凹凸が見られることから同じ技法の可能性を示唆したところ、韓国の大刀は金メッキが可能な銅製であることから非難が寄せられました。しかし表面凹凸の詳細観察からメッキ法による技法ではないことが明らかになりました。これらの例から分かることは、古代の製作技法は合理性だけで決定できないということです。

現代の生産現場で行っている生産技術の研究は、＜観察→推定→実験→検証(観察)→推定→再実験→…＞という際限ないループ状の作業工程で行われています。これを「検証ループ法」と呼ぶと考古学の分野でもこの検証ループ法による研究が重要になってくると言うことです。

単龍単鳳環頭大刀は日本で多くの出土例がありますが、これらと同じ文様の大刀が韓国公州武寧王陵からも出土されています。武寧王陵の大刀は古くから調査され、環頭部はロストワックス(失蠟)法と呼ばれる製作技法で作られたことが分かっています。この技法は、直接加工を施したロウ原型を用いる方法で、外環文様や中心の細部表現まで鑄造段階でつくり出し、最後に鱗など一部の表現を鑿で仕上げるものです。外環文様は、文様部分と余白部分に高低差をつけてレリーフ状に表現し、中心飾も丸みを帯びた立体的な形状につくります。

日本で出土する単龍単鳳環頭大刀を詳細に観察すると外環の側面に環に並行する線状の痕跡が確認されます。ロストワックス法ではこのような痕跡を残すことはありませんから、別の方法で製作されたこととなります。それは間接失蠟法と呼ばれる技法です。

木や金属といった素材を加工して、ロウ原型をつくるための一次原型をつくります。その一次原型を寒天のようなもので包むようにして固め、刀子などで切り開いて中の一次原型を取り出すことで、ロウ原型作成用の型をつくります。そこへロウを流し込んでロウ原型をつくらから鑄造工程に入る技法です。この技法ではロウ型作成用型から一次原型を取り出した際の切断面がロウ原型に転写されるため、環に並行した型割り線の痕跡が残ったものと考えられます。日本で出土している多くの単龍単鳳環頭大刀はこの技法で製作されたものと考えられます。

近年韓国の大伽耶の陝川玉田古墳群などから出土する大刀にもこの技法が用いられていることが分かり、この技法は大伽耶の工人たちが用いた技法であることが明らかになりました。従来、日本で出土する単龍単鳳環頭大刀は、その紋様の類似性から武寧王陵のある百済から伝わったものと考えられてきました。しかし、その製作技法は大伽耶の工人によるものである可能性が高くなりました。歴史的にもその時代に滅亡した大伽耶の人たちの多くが、日本に移動してきたことが想定されます。つまり、単龍単鳳環頭大刀は、日本に逃げのびた**大伽耶の工人**が、百済の紋様を大伽耶の技法で**日本の地**で作ったものと考えられるわけです。これは従来の歴史観を大きく見直す必要を迫るものと言えるでしょう。